

あすなる



第36号

発行
弘前大学教育学部同窓会
相馬正栄

所在地 弘前市文京町1
TEL 0172 (36) 2111 代表

教育学部の近況について

『地域とともに』

教育学部長 戸塚 学

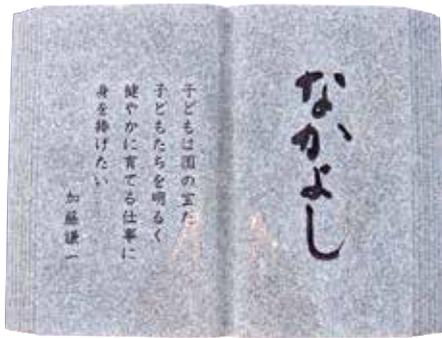
同窓会の方々には、日ごろから物心両面にわたるご厚情を賜り、心から感謝申し上げます。昨年8月には、教育学部正面玄関に立派な掛け時計を寄贈して頂きました。教育学部では、3年間の歳月をかけた校舎の改修も完了し、新しい時を刻み始めました。学生・教職員一同、正面玄関の掛け時計とともに教育学部の新たな歴史を一步ずつ築いていきたいと思っております。

さて、教育学部の現況について少しふれますと、平成28年度から始まる第3期中期目標期間に向け、現在学部改革の真つただ中に入っています。

学部改革の中身については、現在、文部科学省との事前調整が終わり、大学・学部内での最終調整に入っております。詳細をお示しするにはまだ時間が必要ですが、大筋の方向性としては生涯教育課程を廃止するとともに、教員養成の強化、特に小学校教員養成の強化を考えております。これらは、一昨年末に公表された国立大学教員養成系ミッションの再定義(教育学部の進む方向性)に沿った改革内容であり、学部改革の基本方針でもあります。

また、もう一つの方向性としては、実践的指導力養成への質的転換を念頭に置き、地域との連携協働による、「地域協働型教員養成」を新たに展開して行きます。「地域協働型教員養成」とは、従来、学校教育の中に主に置かれていた教員養成を、一部大学と地域との連携協働活動で取り組みを行う「協働型」

加藤謙一(青森師範学校卒業)文庫
記念碑「なかよし」(附属図書館前)



にすることにより、「教師力」「教育組織力」を高めるものです。「地域協働型教員養成」では、学校や教育委員会を介した教育活動を積むことにより、学生のコミュニケーション能力や課題解決能力等をブラッシュアップし、大学以内教育で培った専門の力を実践的指導力(現場で生きた教師力・教育組織力)に変換しようとするものです。

昨年12月5日、佐藤敬学長は弘前大学地域志向宣言を行います。その中身は、弘前大学が、地



就任の挨拶に代えて

教育学部同窓会長 相馬 正栄

域の人財育成やイノベーションの分野で、大きな役割を果たして行くというものです。教育学部におきましても、「地域から期待される教員養成」をテーマに取り組みで参ります。今後は、青森県をはじめ地域の市町村教育委員会、そして公立学校や公民館等との連携を深め、これまで以上にwin-winの関係が構築できるよう努力していきます。同窓会の皆様におかれましては、益々のご理解とご協力をよろしくお願い致します。

平成26年度の定時総会において、同窓会会長に任命された相馬正栄です。実は、長い間、同窓会事務局に携っていた関係上会長に推されたものと思えますが、誠心誠意その責任を果たしたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

昨年の教育学部校舎全面改修をお祝いし、同窓会では正面玄関ホールに設置されている掛け時計を寄贈しました。しかし、学部が充実するにつれ旧校舎が妙に懐かしく、いろいろな事が出てくるのです。

さて、私は昭和36年に入学しましたが、今でも当時の36・中・49という学籍番号が忘れられず、頭の中にこびりついていきます。きつと入学した事への喜びが大きかったからだと思っております。合格発

表は教育学部正門、いわゆる弘前城三の丸東門に貼り出されました。校舎は旧第八師団兵器庫跡地で東校舎と西校舎の二棟あり、薄暗い教室で勉強していましたが、とても大学の校舎とは思えない状態でした。それでも校舎と校舎の間の広場でソフトボールをしたり、弘前公園を散策したりと大学生活を謳歌したものです。

しかし、その西校舎が昭和37年に不慮の火災により焼失してしまいました。その時、有志による「弘前大学教育学部災害対策準備委員会」を組織し募金活動を始めましたが、その活動を契機に、昭和41年6月に「弘前大学教育学部同窓会」が正式に発足したのです。同窓会は今まで会員名簿の発刊(5年毎に改訂)、毎年会報「あすなる」の発行、そして教育



「掛け時計」寄贈式

学部附属教育実践指導センターや大学院開設のための支援を行って来ました。それは当時の同窓会費の納入がすこぶる良好で、学部への支援のほかに定期預金も出来るほど潤沢であったのです。ところがここ数年間は会費の納入が悪く、この先、十分な支援が出来ない状況にあり、今までの定期預金を取り崩しながらの活動であります。どうか学部学生の同窓会への加入をお願いするところであり、国立大学法人としての弘前大学は、第二期中期目標・中期計画が平成27年度で終わり、平成28年度から始まる第三期中期目標・中期計画に向け作業が進められていきます。これから教育学部としても「地域活性化の中核的拠点」を目指し今後大きな改革が行われると思っておりますが、同窓会としてはこれまでどおりの支援を続けたいと思っておりますので、重ねて同窓会への加入をお願いいたします。



火山との共生

教授 鎌 田 耕太郎 (昭和49年卒)

御嶽山の噴火では死者57名、6人の行方不明という戦後最大の火山災害を遺した。紅葉の見ごろの時節と好天の昼時、山頂付近にめかけた登山者にとって偶然の重なりが悲劇を大きくした。山頂付近での生死を分けた被災状況をテレビや新聞の報道で知るにつけ、磐梯山の明治21年(1888)噴火の際に、新潟県から湯治に来ていた僧侶ら5人が奇跡的に生還した記録を思い出した。噴火口に近いた中の湯に投宿中に山体崩壊を伴った大噴火に遭遇したが、助かったのである。山頂付近が消失したその噴火は、当時の官報で、山が「北二向ヒテ横二抜ケタリ」と報じられた。それは噴火の衝撃で山稜の一部が破壊される山体崩壊が起きたことを意味し、その崩壊物は岩屑なだれとなつて麓に押し寄せ大小の堰止湖を作つた。磐梯山の噴火のように山頂付近が抜け落ちてできるU字型の大きな窪地は馬蹄形カルデラと呼ばれる。こうした馬蹄形カルデラは鱈ヶ沢側からみた岩木山や、湯ノ台や葛沼からみた南八甲田の赤倉岳などに見ることができ、成層火山にはよくみられる特徴である。噴火から時がたつと馬蹄形カルデラの痕跡が消え、崩壊堆積物のみが麓に大量に残されることもある。岩木山北東麓の十面沢や恐山の南西

麓などがその例である。馬蹄形カルデラを作る噴火活動は壊滅的な出来事だつたはずだが、最近100年ほどの歴史時代には国内で起きていない。しかし身近にはさらに大きなカルデラをつくつた大規模噴火の跡を見ることが出来る。十和田湖はカルデラに水がたまつたものだが、このサイズのカルデラをつくる破壊的火砕流の発生は縄文時代以降も日本列島の各地に幾度となく起きており、考古遺跡を覆うことはあつても人々の記憶には伝承されていない。個人の一生のタイムスパンに比べると、山体崩壊や大規模火砕流のような極低頻度の災害現象に遭遇する機会は稀である。1980年の北米セントヘレンズ火山や1991年のフィリピン、ピナツボ火山の映像、BBCとNHK共同制作のスーパーボルケーノの科学ドラマは、破壊的噴火のようすがよくわかる教材である。

火山学者による科学雑誌の記事やマスメディアむけの発言は、列島の火山が活動期に入ったと表現するようになった。ごく最近、気象庁は十和田火山と八甲田火山を常時観測対象の火山リストに含めた。火山の噴火時期は予測不能かもしれないが、磐梯山や御嶽山の噴火からの生還者による遭遇時の判断と経験をよく知り、火山の麓

で生活する私たちは登山や観光として享受する恩恵とともに、改めて噴火現象に対する認識を深め、自然の脅威について真摯に取り組むべきである。活火山への登山にはヘルメットを持参することを自己責任の一環として心掛けたい。



私は「特看」卒業生

教育保健講座 教授 葛 西 敦子 (昭和56年卒)

私は、教育学部を昭和56年3月に卒業した特別教科(看護)教員養成課程の10回生です。当時は「特看(とつかん)」と呼ばれていました。あすなろを読まれる方々の多くは、「特看ってなあに?」「そんな課程があつたの?」と思われる方もいらつしやると思っています。

特別教科(看護)教員養成課程は、高等学校衛生看護科の教員養成を目的とし、全国の国立大学教育学部の中に、熊本、徳島、弘前、千葉大学の順に設置されました。弘前大学は、昭和43年4月に誕生したのです。1学年20名という少人数での充実した教育を受けることができました。教育学部の中で教育学と看護学を学び、当時では珍しい「教育学士をもつた看護職」として巣立っていきました。しかし、激動の時代にあつて、医療を取り巻く社会環境は大きく変化し、そして大学改革が行われました。弘前大学では、特別

教科(看護)教員養成課程と医療技術短期大学部とを統合し、新たに医学部保健学科看護学専攻が設置されることになりました。それに伴い、平成16年3月にその歴史に幕を下ろしたのです。36年間で卒業生は33回生547名です。現在も、看護職、大学教員、高校教員、養護教諭など、様々な分野で、全国的さらには国際的にも活躍しています。

その特看には、「弘前大学教育学部特別教科(看護)教員養成課程同窓会」があります。昭和53年3月に第7回生の卒業を機に設立され、同窓生75名でスタートしました。同窓会会長は、1回生の一戸とも子先生(現青森中央学院大学看護学部学部長)が現在まで務めてくだつています。年1回(途中からは2年毎)の同窓会総会の開催や隔年毎の同窓会誌と住所録の発行を通して、同窓生のネットワークを確立してきました。「特看の卒業生です」というだけで、



寄贈した掛け時計

親近感をもち、学生時代の話題は尽きません。時にはやさしく、時には厳しくご指導いただいた先生方、お一人お一人の顔が浮かび、思い出話に花が咲きます。しかし同窓会は、会費納入率が低下していること、会員名簿への住所等の掲載を断る会員が増えていくこと、特看が閉課程となつた今では会員数は減少していくのみであることが現状です。そのため、余力のある今が、同窓会の閉会の時期と判断されました。残念なことにこの夏の8月1日(土)に閉会式が挙行され、37年半の歴史を閉じることになりました。特看の絆である同窓会を閉じてしまうということを大変寂しく思います。

弘前大学教育学部の卒業生であること、何よりも特看の卒業生であることが私の誇りです。今後の同窓生の皆様のご健康とご活躍を祈念します。



学部校舍 2014. 10



藤崎町立明德中学校 教頭 神 田 昌 彦
(平成元年卒)

コスタリカの森を守るために

生態系調査の現場から

私たちの命を育むかけがえのない地球。しかし、その自然環境は、かつてないスピードで劣化しています。そこで、問題解決の糸口を探るべく、アースウォッチ・ジャパンでは野外調査の第一線へボランティアを派遣する活動を行っています。ここでは、花王(株)の支援を得て参加したコスタリカの哺乳類調査の概要を紹介いたします。

コスタリカは世界屈指の動植物の宝庫として知られ、生息する生物の種類数は全世界の5%とも言われます。ところが、その豊潤な森が危機に瀕しています。かつては、国土の75%を誇った原生林が無計画な伐採により、1983年には国土のわずか26%に森を残すだけになったのです。

そこで、政府は森林再生を目的とした政策を導入します。生物回廊等の整備に対して奨励金を支払うものです。研究者たちには、このシステムが有効に機能しているかどうかを評価する役割が任せられました。則ち、この生物回廊を利用する生物種の数と個体数を調べるのです。得られたデータが国立公園等の保護区での調査結果に近ければ、政策の妥当性が証明されます。逆に、生物の生息数に大きな乖離があれば何らかの改善が必要になります。

調査場所は、首都サン・ホセから北西に車で2時間ほどのアラジュエラ地方。テキサスA&M大学ソルティス調査教育センターを拠点に、モニターカメラ、体毛採取トラップ、植物の植生調査等を実施しました。

雪国で育った私が、熱帯雨林に分け入り数多くの動植物の生態を目の当たりにしたことは、劇的な体験でした。類い希な地球環境の価値を再確認したことは言うまでもありません。また、世界各国から集った仲間たちと作業を通して互いの思いを語り合い、生涯の財産を得ることができました。

この地球上には、まだまだ多種多様な自然があります。そして、



大きな理想を見据えて汗を流している研究者とボランティアの方々の奮闘があります。私に課せられた使命は、これらの事実と併せてアースウォッチ・ジャパンの目指す未来像と活動を多くの子供たちへ浸透させていくことだと決意を新たにしています。

弘前大学教育学部・同窓会懇談会 2014

平成二十六年十二月十一日(木)午後四時半から弘前大学五十周年記念会館会議室にて平成二十六年度の懇談会が開催されました。

学部からは戸塚学部長はじめ十三名の教官、総務グループ職員が、同窓会からは相馬会長、三人の顧問、副会長、監事、各支部長、評議員、常任委員等十六名が出席しました。学部長、会長の挨拶の後、学部の各部門の担当教官から説明がありました。戸塚学部長は挨拶の中で特に「地域に根ざした教員の養成を目指していき



い」旨の話をされておりました。まず教育実習について説明がありました。一年次の公立小中学校協力の観察実習と協力校・施設での介護体験実習から始まり三年次の附属中学校園での集中実習で完結するようにカリキュラムが組まれており、選択ではあるが四年次の附属学校園での研修実習、協力校での学校サポーター実習等が用意されており、特に学校サポーター実習については公立小中学校からの要望も多く、教員採用試験にもプラスになっていると考えられるとの説明がありました。

最後に同窓会からの質問に答える形で質疑応答がありました。「就職対策室」の活動内容については三名の特任教授が配置され教育学部生のみならず他学部の学生も受け入れ、また卒業講師等を行っている方々六名にも対応しており、今年度は二名が合格したとのことでした。この取り組みは、学部というより大学全体での事業になっているようでした。大学と民間との連携事業は五件あるとのことでした。



現場との関係では中南教育事務所を通し各地教委と協定を結び、双方の連携を深め、ともにウィンの関係構築こうとしているそうです。今時の学生の様子については「実直でやる気はあるがコミュニケーション能力は不足している」とのことでした。彼らを教育したのは？

平成 25 年度決算

Table with 4 columns: 項目, 25年度予算, 25年度決算, 備考. Rows include 収入の部 (Income) and 支出の部 (Expenditure).

Table with 4 columns: 項目, 25年度予算, 25年度決算, 備考. Rows include 収入の部 (Income) and 支出の部 (Expenditure).

1,962,374円-1,908,350円=54,024円
残額54,024円は次年度へ繰り越します。

平成 26 年度予算

Table with 4 columns: 項目, 25年度予算, 26年度予算, 備考. Rows include 収入の部 (Income) and 支出の部 (Expenditure).

Table with 4 columns: 項目, 25年度予算, 26年度予算, 備考. Rows include 収入の部 (Income) and 支出の部 (Expenditure).

平成二十六年六月七日(土)午後二時から弘前パークホテルにおいて総会が開催されました。

定時総会報告

平成二十六年六月七日(土)午後二時から弘前パークホテルにおいて総会が開催されました。

平成 26 年度 庶務報告

- 1. 25年3月 同窓会費納入依頼
2. 25年4月6日 平成24年度会計監査会、事務局会議
3. 25年6月1日 平成25年度総会(28名出席)
4. 25年6月24日 教育学部へ支援金寄贈(会長、事務局)
5. 25年11月27日 同窓会・教育学部懇談会(15名出席)
6. 25年12月 会報の原稿依頼
7. 26年2月 会報印刷の発注、校正、印刷
8. 26年3月1日 同窓会報「あすなる35号」発行
9. 26年3月22日 弘前大学卒業式(祝賀会なし)

事業計画

- 1. 同窓会費納入
2. 平成25年度会計監査・事務局会議
3. 平成26年度総会
4. 同窓会・教育学部懇談会
5. 同窓会報「あすなる36号」発行
6. 弘前大学卒業式・祝賀会
7. その他

特別会計基金報告

平成 26 年 3 月 31 日現在
<青森銀行関係>
5,330,300 + 1,068 = 5,331,368 円
5,331,368 - 500,000 = 4,831,368 円(支出)
平成 25 年度予算へ 500,000 円を繰り入れる
<みちのく銀行関係>
5,355,363 + 1,068 = 5,356,431 円(利息)

お知らせ

訂正 会報あすなる三十五号の記事で客員教授の斉藤厚氏の職名を「客室教授」と誤って印刷しました。お詫びして訂正いたします。なお現職名は「特任教授」です。
寄付、寄贈 教育学部にオルゴール時計をお贈りいたしました。正面玄関内の正面壁に設置されています。心理学教室の平岡先生より心理学科からとして四万千円余のご寄付をいただきました。
同窓会ホームページ インターネットで弘前大学同窓会のホームページにアクセスしますと教育学部同窓会のホームページが用意されています。会報のバックナンバーが見られます。

平成二十六年役員

- 名誉会長 戸塚 善三(弘前市)
顧問 齋藤 清(弘前市)
顧問 木村 清之助(弘前市)
顧問 鈴木 弘(弘前市)
副会長 工藤 正男(弘前市)
副会長 伊藤 睦(弘前市)
副会長 佐々木 年永(弘前市)
副会長 佐々木 誠(弘前市)
副会長 岡田 淳一(弘前市)
副会長 笠島 明(青森市)
支部長 弘前・中郡支部 菅森 義男(弘前市)
1, 黒石・平川・南郡支部 横山 岩雄(藤崎町)
2, 五所川原・北郡支部 竹浪 誠也(鶴田町)
3, つがる・西郡支部 内山 博文(鯉ヶ沢町)
4, 青森・東郡支部 齋藤 キヨ(青森市)
5, 八戸・三戸郡支部 澤田 明久(八戸市)
6, 三沢・十和田・上北郡支部 岩田 繁雄(十和田市)
7, 三沢・十和田・上北郡支部 梅田 義一(三沢市)
8, 三沢・十和田・上北郡支部 山田 真規(三沢市)
9, 三沢・十和田・上北郡支部 永瀬 俊明(三沢市)
10, 三沢・十和田・上北郡支部 馬場 せつ子(三沢市)
11, 三沢・十和田・上北郡支部 川村 正(三沢市)
12, 三沢・十和田・上北郡支部 樋口 博昭(十和田市)
13, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
14, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
15, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
16, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
17, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
18, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
19, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
20, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
21, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
22, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
23, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
24, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
25, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
26, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
27, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
28, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
29, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
30, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
31, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
32, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
33, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
34, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
35, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
36, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
37, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
38, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
39, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
40, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
41, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
42, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
43, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
44, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
45, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
46, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
47, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
48, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
49, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
50, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
51, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
52, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
53, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
54, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
55, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
56, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
57, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
58, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
59, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
60, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
61, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
62, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
63, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
64, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
65, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
66, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
67, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
68, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
69, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
70, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
71, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
72, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
73, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
74, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
75, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
76, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
77, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
78, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
79, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
80, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
81, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
82, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
83, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
84, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
85, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
86, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
87, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
88, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
89, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
90, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
91, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
92, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
93, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
94, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
95, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
96, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
97, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
98, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
99, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)
100, 弘大教育学部支部 葛西 敦子(教育学部)